

特集「循環型社会の実現に向けて」号の発刊にあたって

常務執行役員

資源・エネルギー・環境事業領域長 井 手 博

循環型社会という観点からみると、世界最大の都市であった 18 世紀中頃の江戸は、際立った循環型社会であったようです。同時期の欧州の大都市ロンドンやパリは、ごみや排泄物^{はいせつぶつ}が川や道端^{あふ}に溢れかえり、悪臭漂う不衛生な都市でした。江戸はというと、ごみ収集を商売とする人がおり、それらを再利用して修理や再生^{なりわい}を生業とする職人がおり、し尿は高価な肥料として農村に運び込まれていたというのは皆さんもご存じのことと思います。エコロジーな日本人の起源はというと、縄文時代^{さかのぼ}まで遡るそうで、青森県の三内丸山遺跡は数百人が居住していた巨大な集落跡だそうですが、驚異的なのはその集落が 2000 年にもわたって同じ場所で維持されていたことです。これだけの長い間、集落が維持できたのは、彼らが森林生態系の一員として循環型社会を実現していたからだといわれています。



こうしたことを考えてみると、日本人の DNA には循環型社会という環境に適合しやすい因子が刷り込まれているのだらうとあらためて思います。

1970 年に開催された大阪万博のテーマは「人類の進歩と調和」というものでした。日本では高度成長期、産業革命以来の急速な技術の進歩が公害などさまざまな問題を顕在化した中で、自然と人類のあるべき調和を追及するというものであったと思います。奇しくも 6 年後に 55 年ぶりに大阪万博を開催しますが、半世紀もの間、残念ながら人類は自然との調和を傍らに置いて、技術の進歩に心血を注いできたわけです。技術進歩の副反応として生まれた環境問題に対して、技術で答えるだけでは新たな異なる副反応を派生させる可能性があるのだらうと思います。特集「循環型社会の実現に向けて」では IHI グループが取り組んでいる技術について紹介しており、それらが近い将来循環型社会の実現に貢献してくれることを強く願っております。しかし、技術開発に並行して検討すべきビジネスモデルに加えて、循環型社会の構築に必要な経済・法制度の整備や、生態系の一員としての倫理観の醸成についても思いを致すことが大切だと思います。また、前述しましたように自然共生的 DNA を刷り込まれた日本だからこそ、技術と豊かな自然との調和を実現できると信じています。

循環型社会を実現するショートカットは容易には見つかりそうもありませんし、新技術ばかりが解ではないと思います。まずは CO₂ などの排出物の減少 (Reduce)、資源の再利用 (Reuse)、再資源化 (Recycle)、資源の回生 (Retrofit)、長寿命化 (Repair) を徹底していくことが現実的です。その観点では IHI グループの既存の技術・製品についても、高効率化や省人化などを通じて、循環型社会実現の入り口では大変重要な役割を果たすものであり、ブレークスルー技術創出への橋渡し時期における貢献であらうと思います。

IHI グループは脱 CO₂・循環型社会の実現に貢献して参ります。しかしながら先に述べましたとおり、技術開発だけではなく、ビジネスモデル、制度や啓発などさまざまな観点からのアプローチが不可欠です。そのため、さまざまな方々との連携やパートナーシップを構築していきたいと考えておりますので、循環型社会実現に向けて、お声掛けいただければ幸いです。